

日本が誇るジャズ・テナー・マスター

川嶋哲郎【Tetsuro Kawashima】



写真提供：フォーキャスト・ミュージック

これまで聴いたことがないアルバム！これが『祈り』を聴いた後の率直な感想だった。このアルバムの1曲目に収録されている「サルヴェ・レジーナ」は、ジャズの世界、ジャズのアルバムでは前代未聞のアドリブ一切なしという衝撃のナンバー！「月」と「陽」をテーマにした組曲を挟んで奏でられるシューベルトの「アヴェ・マリア」。そして、オリジナル・ナンバー「ラメントーション」に続いて、美しいフルートによるカッチーニの「アヴェ・マリア」がアルバムのラストを飾る。この川嶋哲郎カルテットの最新アルバム『祈り』◀2012年11月7日発売 DDCZ-1838 定価：¥3,000（税込）▶は、川嶋哲郎が若手を率いて吹き込んだという単純なアルバムではない。また、リーダーだからと言ってバリバリとサクスを吹きまくるアルバムでもない。川嶋哲郎が「理想のバンド」と語る現在のカルテット、音楽について腹を割って語ることができる仲間と「音楽の素晴らしさ」を表現した作品であり、またそれだけでなく、現代ジャズ・シーンに一石を投じるアルバムにもなった。この渾身のアルバム『祈り』リリース直後に、日本が誇るジャズ・テナー・マスター川嶋哲郎に語ってもらった。

【2012年11月13日「石森楽器」にて 取材・文：加瀬正之】

★このインタビュー記事は『The Walkers』のFacebook Page におみ掲載されていたものですが、好評につき、また、Facebook での表示に不具合等もあり、今号で完全版掲載を決定しました。》

●このアルバムは川嶋さんにとって特別なアルバムになりましたね。

メンバーはみんな僕より10歳以上若いですけど、同じようなメンバーで以前『哀歌』というアルバムを出したんです。その時は僕がほとんど決めて仕切ったんですけど、最近は付き合いも長くなってきて、みんなその道のスペシャリストなので、今回はみんなに任せて意見を出し合って決めましたよ。昔から4人くらいのユニットになると、僕はだんだん吹かなくなってくるんです。任せるとタイプなんです。まわりが積極的のソロをやるんで、音は半分くらいしかソロを吹かなくなった時期もあったんです。僕は音楽が好きなんです。視点があくまでそこにあるので、音楽の一部として自分を捉えた時にバリバリ吹きすぎるのだけというの、みっともないっていう感じが先に来るんですよね。みんなががりり吹けるのであれば、自分は吹かなくていいって。そういう美的感覚が自分の中に元々あったんです。客観性を持っていたいという、マイルス・デイビスやキース・ジャレットのようにトータルで考えたタイプなんです。僕は元々クラシック少年だったんで、クラシックでそのように淘汰されたものですよ。だから、自分のカルテットではロリスとカコルレーンのように吹きまわすということではできない時もあるんですよ。それで無理やりソロやデュオをやったという経緯があったんです。願わくば、今回は無責任なプレーヤーとしてでなく、音楽家としての作品を作りたいかったです。だから、そういう作品になっていきます。特別なアルバムになってますね。また、ジャズで長くやっていなきゃ分からない部分があって、自分のキャラクターなどが分からないと本当に表現できないんですよ。これまでアルバム制作もいっぱいやらせてもらったので、こういうことをするとこういうことが起こる。こういう目に合う。良いことも悪いこともあんですけど、そういう発見がいっぱいあったんです。自分のサウンドに合った構成の曲、メンバーもそうだし、そういうものを発見できた状態で、自然と僕のような年齢45、6歳らしいになると回りを見てみんなどんなキャラクターを理解していますよね。そうすると自然とこういう形になったという感じですね。そういう意味でもかなり特別なアルバムになっているように、充実感もあります。

●今回「月」と「陽」というテーマにした組曲に取り組んだ経緯は？

組曲（無礼やりしよ）と思ったのではなく、「リハネ」っていうのがあってんですよ。（※ここで川嶋さんが実際にピアノを弾いて「リハネ」を聴かせてくれた。）音楽の構造、大意に対してどう取り扱いかを決めていき、それがどのようになら変わるのかわかるという可能性を試すことで、それをやっていった時にアイデアが3つも4つも出てきて、これらはどれも捨てたがために繋げて曲にしちゃうというイメージで仕上がったんです。組曲は「月」を先にして頂くんですけど、「月」はイメージが暗めなので、反対に「陽」を（先）はすって明るいものができれば面白いと思ったんです。試しに書いてみるんですけど、もしレコーディングでも面白いの時に今回しかなくて、次回にするとまた大変な作業をやらなければならないので、やらせてもらえるなら今回一気に頑張って形にしてしまおうと思いました。

●このアルバムは川嶋哲郎のリーダー作というより、正に「川嶋哲郎カルテット」のアルバムという印象が強いですね。

それは嬉しいですね。自分より音楽が大事なんで、この人こういう人なんだって分かるよりは、これっていい音楽だなあと思って欲しいんです。例えばコンサートに行った時に、そのミュージシャンが音楽とか、どういう人かというのでもよくなくて、今日は本当にいい演奏を聴いて良かったなあっていうのもあって、やっぱりそちらの方が上だと思ってるんですよ。だから、この人らしいなあって思われる方がまだまだですもんね。そこに気が付いているなら、そなるようにすることによって充実するわけで、そうすることによって自分が自分らしくなれると思えますね。

●今回はジャケットでテナー・サクスを見せていないですね！？

横田さん（フォーキャストミュージック代表&プロデューサー）にこれにするかって言われて、「はい」って言ったんですけど（笑）。ピアニストにピアノを任せるのと同じで、テザンもみんなプロの方が手が付けてくれましたから、その道のプロがみんな自分の力を発揮して作り上げるものなので、僕は演奏

するだけ、あとはお任せしました。

●レギュラー・メンバーである3人について、川嶋さんより紹介して頂けますか？

ドラムとベースは『哀歌』の時と同じメンバーで、ドラムの長谷川くん（長谷川カウ）というのは、都内で行なわれたとあるセッションと一緒にあって、終わった後に、かなりダメ出しをしてしまったんです（笑）。最初はどしても相手も聞いてやうですよ。これにはいろいろな意見があると思うんですけど、まずは自分がどう思うかの伝えること。自分の意見に責任を持つっていうのがアンソングの基本だと思っているんで、自分自身がどう思うっていうのが先に来るようじゃダメなんです。まず、自分はこう思うって伝えて、それがビタツと合えばじゃあ素晴らしいことはないわけでもない。その素晴らしいを味わうためにやっているわけですから。もし合わなかったら、合わなかった時に考えればいわけ、ととりあえずは意見を合わせるというように順番が逆になっていくことが多くて、そんなことしたら楽しいも何ともないですからね。だから、彼にそんなことを言ったんです。でも、それを分かってくれ、凄く一生懸命やってくれました。だから、彼が最も演奏のスタイルが変わりましたよね。自分から作るようになってくれ、逆に毎回一緒にやる度に何かを期待させるようになってくれましたよね。あと、僕もかなり怒ったんで、言った手前ちゃんと責任を取らなければダメだと思ったんです（笑）。それで、暫く彼と一緒にやろうと思って、それが実を結んできたっていうことです。

安田くん（安田幸司）は、僕はこれまでいろいろなベースの人とやりましょけれど、スタイルのほとはでもオーソドックスでボトムもあって吹きやすいですし、一緒に音楽をやる時はサクスとベースは全く正反対のポジションですから、それをちゃんと分かってくれます。人柄的に自分のポジションを分かっていることは素晴らしいことだし、あと、彼だけが毎回演奏が終わった後に「どうでしたか？」とか、「何か悪い何かあったですか？」とか自分から必ず聞いて来るんですよ。それは凄くいいと思います。上手い下手は抜きに音楽の話をちゃんと腹を割ってできる人ですからね。今までそういうことを一番強く感じられたプレイヤーっていうのが安田くんと長谷川くんこの2人だったっていうことで、それですべてお付き合いが続いています。

ピアノの田窪くん（田窪寛之）っていうのは、スタイル的にはひとこと言えればふわっとして、とても繊細なタッチなんですよ。日本では割と勢いがある方が好まれるんですけど、彼はその対極線にあると言ってもいいかもしれません。でも、そういう所を比較するだけではなくて、ちゃんどうやしたいと思うようにやっているっていうこと、特徴があるっていうことは凄いことなんです。彼は今回のアルバムでも凄く真面目を發揮しましたよね。凄く優しく丁寧な部分を持って、彼じゃないことこのアルバムはできなかったと思います。凄く真面目ですし、今一番音楽の語りができるのが田窪くんですよ。この3人のカルテットは僕にとっては理想のバンドですよ。まあ、やりたいうようにやらせてもらってます（笑）。

●アルバム1曲目を飾った「サルヴェ・レジーナ」はアドリブ一切なしという前代未聞の曲になりましたね。

あれはもう1曲目しかないというくらい演奏が良かったんですよ！（笑）。前作の『哀歌』の時もそうだったんですけど、1曲目に録る曲はだいたいアルバム1曲目を入れるんですよ。なので、たいてい録った順番にアルバムに入っていますね。長年やっていると自分の中で「これは多分凄いものになる！」っていう自論見があるものがあるわけなんですけど、まず録りたいもの、形になるもの、今回の自分の方向性を示すものから録っていくんです。それはなぜかと言うと、とりあえず調子の良い時に録ろうかって言って、混沌とした曲を録っていくんですけど、それでもしそのテクニックが良くても、演奏が長かつた場合、残りの曲を調節して吹かなきゃいけないんですよ。凄く長いけど長いんだよねとか、そういうシグナルが必ず出てきて、そうするとそれに合わせて全体を作っていくっていうのがキガ作業になっていくんですよ。だから、基本は基本は後先考えなくて録りたいものから録る！食べたい物から食べる！（笑）っていうのが基本ですよ。「サルヴェ・レジーナ」に関しては、たいていこういう風になっているっていう予想はあったんですけど、ちゃんとバンドでやったことなかったのが実際に音を出すまでどうなるか分からなかったん

です。でも、いきなりやってみたら、「凄いやつになったなあ」って思いましたね。テーマ設定だけなのちやんとジャズになっているっていう、これは恐ろしいことですよな。何か凄みを感じます。でも、いつかやりたかったことではあったんですよ。元々僕はこの曲を知らなくて、それで横田さんから音源をもらったんです。曲そのものは僕は大好きで、普通だったらそこどこやうってアドリブを入れるかって考えるんですけど、アドリブするとそれだけで15分くらいですからね。どうしたらいいんだろうって、いろいろやり方を考えた挙句、「何もしない！」ということになったんです(笑)。

●ジャズ・ミュージシャンとして大切なこと

正直に演奏することですね。ジャズっていうのはいわゆる言語なんですよね。いろいろな見方があるんですけども、演奏するっていうのはジャズ語で喋るっていうことだと思うんです。例えば、音楽学校などで勉強して一番になって、それで人前に立って演奏するっていうのが当り前の時代になってますけど、そうするとどうやって一番になれるのか、世の中どうなっているのか、ニューヨークがこれ流行っているとか、私は先生にこれを習ったとか、私はこういうことを知ってますとか、そういうことは声高らかに喋れるんです。でも、私はどう思うんですっていうことは喋れないんですよ。勿論、その気になれば喋れるんですけどね。正直に自分がいい、自分はこうだっていうことは喋れないんです。昔からすると今はジャズがたくさんの人に聴かれなくなっていると思うんですけど、それは何でかかっていう、やっぱりつまんないからで、何でもつまらないかかっていうと、ミュージシャンが知っていることか言っていることかあるやつかに会い(笑)。矢沢永吉が「コンサートっていうのは、言いたいことがあるやつに会い(笑)」って言うてましたけど、素晴らしいと思うんです。言語はいっぱい喋れた方が得ですけど、でも、全然本質じゃないですよ。あと、本当に大事なことは、そもそも「自分がいいと思うものがありますか?」っていうことですね。「正直に自分がいいと思うものを持ってきて」って言った時に「正直、ないです…」っていう話もなくて、もうそれは演奏する資格なっていることになっているのかというのを勉強し始めて、正しいことをまっしぐらでやっていこうとしているんで、だから、本当に大事なものはそこかもしれないですね。自分の意見を持つっていうか、好みを持ちましょうということですね。若いうちはできてもいいです。できるできないではなくて、僕は何が本当に好きなのか知りたいですよ。それと、ジャズは言語なんですけど、言葉だっていうことは喋もつけないってことなんです。いろんな言葉はたくさん覚えるけど、喋もつけないよってことなんです。言葉のバッドツクって知ってますか?「私は喋つてます?」っていうと、この人は本当は喋りたくないのかどうなのかというジャズが出て来ないんです。「私は喋つてます?」って言って、それが本当だとすると喋つてないってことか「嘘になるから本当だ」とかになるし、それは本当だとしてそれは喋りになるし。じゃあ「私は喋つてます?」っていうことを言うてことは一体どうかかっていうか、「何も言っていない」ってことになるんです。だから、私は喋つていないとか、本当のことを言っているっていうこの言葉に意味はないってことなんです。それはつまり、言葉っていうのは何の意味もなさないってことなんです。面白いですか?(笑) だから、喋つていこうかどうかっていうのは、結局自分が信用できるかどうかってことなんです。いっばいなんでものを吹いても何の意味もなくてことなんです。演奏する人はそこをもちょうと思わなきゃだめですよ。そういうことを全然知らないから喋つていこうよというか聞かなくて、そうするとつまんないわけですよ。つまんないわけは聴かないわけです。じゃあ、どういう人が聴くかという、そういう技術の身に付いた人がサンプルとしてそれを聴くっていうことですね。「ああ、こうやると喋つてるんだ」とか、「参考になるな」とか、そういうことを勉強したい人だけが聴く音楽に変わってって、結局ジャズは隔つて追いやられると僕は理解しています。言い過ぎましたかね(笑)。

●現在のジャズ・シーンについて

ジャズを作っている人とかジャズを演奏している人とかが媒体が、ジャズっていうのは難しく、分る人しか分らないものなんだという風に作り上げている部分はあります。でも、ジャズも音楽なんでも昔のマイルスとか、ロリンズとか、そういう人たちの演奏を聴くとやっぱりいいですよ。ラーメン屋とかでかかっているのも難しいかと思わなくても、それとやっぱり音楽が素晴らしいってことかと思うんですよ。そういう大事なところが抜けちゃってますよ。言語として難しいものであることは間違いないんですけど、でも、その難しい言語を使って感動を表現するのはできるはずなんです。難しいのはジャズのおいところを壊しておいもいんだけど、言葉で難しいって人を感動させることはまだ別なわけ、何かそういうことが置き去りになっていますよ。だからこそ、スルージャズとか、そういう簡単な言葉で簡単なことを言うていうのが逆の勢力として繁殖しているというイメージはあります。だから、僕は何とかしてそういうものを取り戻したっていう気持ちがあるんですけどね。それが、今回の1曲目とかに出ていると思います。難しい言葉を喋っていないっていうか、言語としてはむしろ喋っていないわけ、アドリブがないわけですからね。ある意味、相当ジャズという音楽に反旗を翻すというか、アドリブを否定する行為ですからね。そんなことに意味はないって言うているわけですから(笑)。でも、あの1曲目とか聴いて、普段ジャズを聴いていない人とかにも分かりやすいと思うんですよ。逆にこれを聞いて「こんなジャズじゃない!」とかいう人も多分出てくるんですよ。まあ、全然それはそれで仕方がないと思いますけど。音楽として素晴らしいけれども、そういうものがジャズであって欲しいし、今後はそういうものを作りたいと思います。

●来年計画していることはありますか?

仕事は来たものをやっていくって感じで、制作に関しては横田さんとどうしたいかという話を一応しています。みんなが知っているような日本の童謡とか唱歌なども昔から取り組んでいるんですけど、難しいアドリブをするんはよくないです。でも、そうすると企画ものみたいに扱われる可能性も高いんですけど、そこは勝負ですよな。ソロではそのようなことをやっていますんで、やっぱり



バンドでやりたいですよね。今回の1曲目みたいな感じで、音楽としてそれを音色で聴かせるとか、そういうものをぜひ作ってほしいなあって思います。

●川嶋さんの夢は?

夢、ですか(笑)。誰いことができた方がいいっていうのは、コンサートホールみたいなものを作って誰にも邪魔されずに毎日そこで演奏することですね。僕が何で会社員をやめて(27歳の時に)この世界に入ったかっていうと、自分から出る音、音楽をもっといいものにしたいからなんです。音楽が大好きなんで、自分から出るものが汚いのが許せなかったんです。それをなんとかしたくしてやなくて、スキルをなく上げてきたつもりです。そのためにこれを職業として一心同体となって、それが良ければお金が入って。だから、これまでやってきた方が結局いいんじゃないかと思っちゃったんです。だから、ここで食べていいかとは思ってないです。もう、こういうこと話していいの自分から聞いてますよ…。音とかで教えるんですけど、みんなこれで食べていくって思ってます。もうそうと、ここで食べていいためにどうすべきかという逆算にあって、そういう生き方をしたいわけですよ。そうするとつまないプレイヤーになって、そういう人の演奏は誰も聴かなくなつて生きていくという順番がどいていって待っているわけですよ。だから、何かでこれ食べていくという人が目の前で演奏してたとして、それをみんなでお金払って聴こうと思わないですよ。何かとしてそれで食べていこうというだけやっていけるわけだから、それだけが夢なんです。そんなものに付き合っている暇はないですね。ただ、みんな何を聴きに来るかという、「ちょっとでもいい演奏したい」、「ちょっといい上手くなりました」、「成長したい」とか、そして、それのために一生懸命演奏している人がいたら、そこにやっぱり夢を見させてくれるわけだから、たとえちょっと遅かったとしてもそういう風に自分の演奏をみんな聴きたいと思えば、そこにお金を払うと思いますよ。だから、それもバッドツクというか、凄く難しい所ですけど、何とかして生きていきたいと思っている人っていうのは生きていけない人なんです。僕の経験上だいたい(笑)。そうでなくて、生きていけるかどうかに関して言えばもう生きていけるように生きて。100円いくらあっても100円100円生きていけば生きていけるわけ、それが10万円だったら、10万円の生き方をすればいいということかして。生きていけるかどうかっていうことはどうでもいって話になるわけなんです(笑)。最初に言ったように、外側に対する夢としてはコンサートホールみたいなものを作りたいとは思っていても、でも、それはやっぱり本当のことはなくて、いい演奏がしたいんですよ。それが夢ですね。そう思っていないとお金も入ってこないですよ、結局。冗談抜きにそれだけいいんですよ。あとは別に何も必要なんです。僕は音楽の素晴らしさを伝えたいと思って世の中に対して接している、一人のプロのミュージシャンとしてはそれが一番の目標なんです(笑)。うーん、言葉として表現が正しいかは別ですが、そんな感じですよ(笑)。

●最後に、川嶋さんのファンと The Walker's 読者に向けてメッセージをお願いします。

この作品を通してもっと音楽が好きになってくれたら嬉しいですよ。「クラシックがこういう風になるんだ!」っていう驚きとかもあるし、「アドリブがなくてこんな風になるんだ!」「テナー・サクソフってこんな音が出るんだ!」とか、この作品を通してひりひりでも多くの方にそういう音楽の素晴らしさを分かってもらえたらそんな嬉しいことでもあります。

【川嶋哲郎 Official Web Site】

<http://tetsurokawashima.com/>

川嶋哲郎カルテットの最新アルバム

祈り

川嶋哲郎カルテット

フォーキャスト・ミュージック

DDCZ-1838

¥3,000 (tax in)

2012年11月17日発売

